

おはようクラブ

A そうそうそうそう、それで、思ったんだ。苦しいことはもうやめにしよう。ぼくたちは気づかないうちにたくさんの服を着てしまったから、ひとつひとつ、脱がないと。悪い言葉っていうのがあって、悪い言葉は悪い言葉としか、繋がらないんだ。このままだと、倒れちゃうよ。悪い言葉とぶつかるたび、ぼくたちは知らず知らず服を着てしまうんだ。服は何枚でも着れるんだ。それはちっとも気づかないんだ。服は、いつのまにかぼくたちの気分ですら影響を与えてしまう。気分はいい？ 気分はいい？ わからないな。気分なんて、わからない。ちょっと自分の気分について考えてみよう。……。……。うん。どうだった？ 僕はこの世界に対して、昔は感じていたはずの、多くの期待や希望について、なつかしさというよりむしろ、違和感のようなものを覚える。どこからが捏造で、どこからがまた捏造の捏造なのか、まあ捏造というの、決して悪意のあるものではないのだけれど……。僕は毎朝生まれ直して、生まれ直すたびに少しずつ違う世界に来ているんだと言えば、それは実感に合ってる。気がつけば、遠くまで来たものだ。マイケルだって死んだしな。えっ？ マイケルだよ、マイケル。知らないかな。ジャクソンファミリーの8番目だよ。ほら、テレビゲーム好きで有名な……。知らないか……。誰も知らないよ、そんなこと。元の世界に帰りたい、そんなことをふと口にして、一体何になるのかわからないけど、少なくとも誰にも否定されない、理解もされないようなことに、僕はわずかなりの癒やしを感じるんだ。チョコボール1個ぶんの癒やしを。ピーナッツ。いまいくらなんだろう。「チョコボール、一箱分の一日を、指でひねって、ごみ箱の中、僕は今、板橋の駅に立ち、電車を……」パロディにはもう意味なんてない。きっと訴えられて頭をさげて謝っておしまい。ぜんぶおしまい。あらゆるものが見たことのある光景に還元されてしまい、永久機関が完成する。感情の永久機関が。そしていつか無になる。僕自身は、死によつては終わらない、きっと無によつて終わる、そんな感じがする。つまんねえ……。つまんねえという、これは呪詛。ジャン・ジュソ。20世紀のフランスの文豪。ジャン・ジュソ。河出からセレクションが出てる。

B 13歳になるころ、父が言った。一つの真実というものを根拠にはいけない。一つの真実をもってすべてを判断してはいけない。一晩中演奏を続ける群衆の、入れ替わり立ち替わり楽器が入り乱れるさま、コードもソロもなく、はじまりもおわりもなく、演奏者も聴衆もなく、朝日に溶けていくまで、踊り続けるような様子を思い描いてごらん。それがきっと一番楽しく、そして楽なありようのはずだよ、と。そのせいで僕は中途半端な大人に成長し、あらゆるものを決断せず、ぐずぐずと先延ばしにする傾向を身につけてしまった。父の世界には、きっと終わりなんてものは存在しなかったのだろう。彼はその10年後、工事現場の近くを通りかかって崩れてきた荷物につぶされて死んだ。きっと自分が死んだことも気づかなかったと思う。父の部屋には、帰ってから食べるつもりだったプラム・ケーキが残されていた。葬儀のあいだ、妹はずっと黙っていたが、翌日に僕を呼び出すと、真面目な顔で言った。「家を出て、遠い街へ行こうと思う。」「どうして？」と僕は尋ねた。妹は専門学校に通い始めたばかりだった。「せっかく奨学金をもらえたのに。」「しかしその質問ははぐらかしたまま、妹は数日でばたばたと支度をし、家を出ていった。それから音沙汰がないまま、僕は高校の同級生と結婚し、30歳の誕生日を迎えた。例の工事はまだ終わっていない。

C 誰の話？

B そんな気がしたんだよね。あ、僕の父は元気ですよ。

C 私の元気を保とうとするモチベーションはあまりに高く、そのために毎朝4時半に起きるほどだ。先月のお給料は輸入品のマットレスに溶けて消えてしまった。サボテンを一匹飼っているので、大きくなったらタコスにしてやろうと思う。私の部屋は東にしか窓がなく、そこには川が、ときた

ま変な音をたてる。でっかい鳥が鳴いてる。私の朝は一杯のペプシコーラから始まる。糖分とカフェインを効率よく脳に送り、朝のラジオをつけると、その日は武満徹特集だった。私は読みかけのアメリカンサイコを手に取り、人をダメにするソファに埋もれ、じっと時間が過ぎる気配を、肌で感じ、朝が私の腸を満たす。それをトイレに流してから着替える。曜日ごとに決まっている服の、水曜日だから気持ちの悪い柄の、よく見ると動物の顔をした、ごわついたシャツ、袖をまくって、メイクし、概ね、整う。休みの場合なら、着替えずに、もう1時間だけ寝る。夢の中に、ピエロじみたミュータントが現れ、しかし私はそのことを、最近映画で観た、ヒュー・ジャックマンか何かだと思っている。光化学スモッグの、警報が発令されたという声がする。これはきっと現実の世界の中で、防災用のサイレンがそう言っているのだ。今どき、スモッグだなんて、時代遅れな。私は窓のそばで、光がまぶしいと思いながら、本日2杯目のペプシコーラを飲む。炭酸なので喉が痛い。私がここでベランダで大きな声で歌ったら、ドローンのカメラはずっと引いていって、スケールの大きい感じの、風の気持ちよさそうなシーンになってしまうだろう。(裏声で歌へ)「アンシンナボクラハタビニデヨウゼー、オモイキリナイトリワラツタリシヨウゼー」

D そのコーヒーどこで買ったの？ ウルフマンジャック？ 僕は概ね板橋のあたりをぶらついて、週2で古着屋で働いてるんだけど、他の日は映画のレビューとか書いて稼いでる。ザック・スナイダー作品に関しちゃ、ちょっとした権威さ。コーヒーまだ飲む？ そのコーヒーどこから来たの？ 南米？ 僕がホンジュラスにいたとき、小学校3年生から4年生までなんだけど、そのとき君はどこにいたの？ 僕はこの国の未来をすごく憂えていて、選挙のときはいつも国民革命党に入ってるんだけど、知ってる？ 国民革命党の新聞ってね、すごい安いんだよ。水木しげるの漫画も載っているし、昔の未発表のやつ。『マグマくん』っていう。知らない？ 『マグマくん第三帝国』は？ マグマくんがナチスに乗っ取る話。ビレバンでよく売ってるよ。仲間が3人いてさ、つまり4人組で、ドイツに向かって旅をする、その道中がすごくいいんだ。僕はあんな風に旅がしたいとずっと思っていた。死んだり死ななかつたりするんだけど、そんなことはどうだっていいんだ。お腹が空いたとか、眠たいとか、そういった欲望に忠実でいながら、悪いことだってするんだけど、でもそんなことはどうだっていいんだ。裏切ったり裏切られたり、絶対に仲良くはならなくて、でもどうだっていいんだ。ところで今日は東からの風が吹いているね。

A (踊りながら”Magical Mystery Tour”を歌う)ろろー、ろろっぷふおざみすてりーとうあー、ろろー、ろろっぷふおざみすてりーとうあー

Bを旅の仲間にする

A ろろー、ろろっぷふおざみすてりーとうあー、ろろー、ろろっぷふおざみすてりーとうあー

Cを旅の仲間にする

A ろろー、ろろっぷふおざみすてりーとうあー、ろろー、ろろっぷふおざみすてりーとうあー

Dを旅の仲間にする

B 船が出るまでまだ時間があるよ、それまで好きに飲んだり、食べたりすればいいよ。

A パンツ足りない気がしてきた。

C そばのにおいがする。

A パンツ2枚じゃぜったい足りないよね？

D 足りないよぜったい。

A 足りると思ったんだよね。
D 足りないってぜったい。
B まだ時間があるよ。
D 足りないってぜったい。
A 足りると思ったんだよ。
C 買ってきたら？
A でも足りると思ったんだよ。
B わかるよ。
A あっそれおいしそう。
C おいしそうだね。
A 買ってこようかな。
C 買ってきたらいいよ。
A 買ってくるよ。
D パンツ？
A パンツは足りると思ったんだよ。
B わかるよ。
A 思ったんだ。
C これまずい。
D でもおいしそうだよ。
C おいしそうだけど、まずいよ。
D おいしそうなのに。
C まずい。
B それラーメン？
C ラーメンじゃないよ。
A ラーメンパンツ。
D ラーメンパンツ？
A えっ、ラーメンパンツ？
D ラーメンパンツって何。
A パンツとラーメン。
D パンツとラーメン？
A 語呂が。
C ラーメンじゃないよ。
A 語呂がいいんだよ。
C ラーメンじゃないってば。
A 疲れたな。
D でも買ってきたほうがいいよ。
A もう疲れたな。
B まだだいぶ時間あるよ。
C 心はいつも、冬景色。
A なんだって。
C ごちそうさま。
A 今不思議なこと言ったよ、この人。
D 買ってきたよ。
A お、パン？
D パンじゃないよ。
A それはあまりおいしそうじゃないね。

D そう思うでしょ？ そう思うんだよ。
B パンツはもういいの。
A 疲れたな。
C 疲れたときは、お灸がいいぞ。
D 買ってきなよ、せんねん灸。
A でもさあ、ぜったい足りないと思うんだよね、パンツ。
B 足りないよぜったい。
A 買ってこようかな。
D 買ってきたほうがいいよ。
A 買ってくるよ(去る)。
C それ、パン？
D パンじゃないよ。
C あまりおいしそうじゃないね。
D そうなんだよ。あまりおいしそうじゃないんだよ。
B おいしいものが、いつもおいしいとは、限らない。
D 哲学だ。
C 哲学クラブ？
D えっ哲学クラブ？
C 哲学クラブじゃないの？
D 哲学クラブじゃないでしょ。
B 哲学クラブじゃないかな。
C 哲学クラブじゃないの？
D 哲学クラブじゃないよ。
C 哲学クラブだと思うよ。
B 哲学クラブじゃないかな。
C 哲学クラブじゃないか。
D 哲学クラブじゃないよ。
C 哲学クラブじゃなかった。
D うん。
C ごめんね。
D いいよ別に。
A (登場)買ってきたよ、ラーメン。
B ラーメン？ パンツは？
A えっラーメンパンツ？
D ラーメンパンツって何。
B パンツは？
A パンツ？ あっパンツ！
C パンツパンツ。
A どうしよう足りなくなっちゃうパンツ。
D 足りなくなっちゃうよ。
A どうしよう。
D どうしようねえ。
B まだ時間あるよ。
D そうだよまだ時間あるよ。
C 心はいつも、冬景色。
A あっまた不思議なこと言った。

- C 哲学クラブだからね。
- B 哲学クラブじゃないよ。
- C 哲学クラブでしょ？
- D 哲学クラブじゃないよ。
- C 哲学クラブじゃないの？
- B 哲学クラブじゃないよ。
- C 哲学クラブじゃなかったっけ？
- D 哲学クラブじゃないよ。
- C 哲学クラブじゃなかったか。
- B 哲学クラブじゃないよ。
- C 哲学クラブじゃなかった。

沈黙

- A パンツ買ってくる(去る)。
- D おいしいクラブってどうかな。
- B 微妙だなあ。

C 私たちはそろそろ、目的についてちゃんと話し合ったほうがいいと思う。それは例えはっきりしたものでなくとも、目的というものについてどう考えるのか、言葉にすることには意味があると思う。少なくとも私自身は、この旅には意味があると感じている。私は思い出すべきことがたくさんある。失われたものにあらをかい、知らないふりをし続けることは私には難しいことだった。私は努力をしたほうがいいと思う。努力が大事。努力さえあればなんでもいいとすら思う。

B わかるよ。だから少なくとも何人かで一緒にいることが大事だと思ったんだ。ひとりかふたりだと本当にだめだね。ひとりかふたりだと、いつも終わってしまう。孤独に希望がある気がしていたのは、少しは過去の話だ。僕はニュータウン育ちだし、ニュータウンというのは不断の保守によって、いつまでも20世紀の理想でありたいと考えている。子供のころはまだ散歩ができた。間違いを犯してしまわないために、僕たちは複数でいなきゃいけないと思ったんだ。僕たちは何人ずつのまとまりでいたら一番いいだろう。

D とはいえ、無理なことは無理だし。僕には自覚があるよ。ある日目覚める。気分がよかったり悪かったりする。それはどうしても無理なんだよ。無理だから仕事に行かない。無理だからジョギングする。それは絶対そうだよ。無理だから旅をする。無理だから目的地は、知りたくない。そうじゃない？ 今までそれを押し通して、果たして意味のあることがあった？ 僕たちの義務は、呼吸だけってことにして、僕は脳を休ませていたいんだよ。左右の脳をね、片方ずつ。順番に。寝ることと旅することの違いが、僕にはわからないんだよ。

C 信仰の問題に回収されてしまうことに対する嫌悪感のようなものがずっとあるので、苦しむことが多い。だいたいそれは、ため息になってしまう。ため息でなければ、もっと純粋な嫌悪になってしまい、私は嫌悪とうまく付き合いきれない。付き合いきれないものに対していつまでも、私は自分の有限な一日を、残り少ない石鹼みたいに使うのには、私はしんどい。

A (登場)石鹼とはうまい表現だね。石鹼が尽きてしまったときの戸惑いの中に、かろうじて思い出せるようなものが、あまりに凡庸に世の中に溢れていて、その凡庸さに窒息しそうになる。かと

いってどうすればいいかというと、答えというものは無いから、だから僕はいつもの悲しい思い出を離れて、どこかに行ったらいいんじゃないかと思ったんだ。パンツ、5枚買ってきたよ。

B どうして5枚買ったの。

A 4枚より多いんだよ。

D 本当だ！ 4枚より多い！

A 5枚だよ。

C 何で4枚より多いの。

A 5枚だよ。

D よかったじゃん。

A これで心置きなく、ミソラーメンが。あっ、のびてる！

C もう一度買ってきたら。

A 文句言ってくるよ。

B 文句言っちゃダメだよ。

A ふざけてるよ。

B ふざけてないよ。

A ふざけてるよ、本当に。

D 4たす1は、5。

C 1はどこから来たの。

A ふざけてるよねえ。

D 1は、あるんだよ。

C えっわかんない。

D 5があって、4があるでしょ。すると、1があるんだよ。

C どこから来たの。

D あるんだよ。

C ないよ。

D あるんだよ、1が。

C どこに。

D だから、5があって、4があるでしょ。

C あるよ。

D すると、1があるんだよ。

C わかんないよ。

D あるんだよ。

B もう一回言って？

D だから、5があるでしょ。

B ある。

D 4があるでしょ。

B ある。

D そしたら、1があるでしょ。

C ないよ。

B ないよ。

D あるでしょ。

A えっ何の話？

D だから、1だよ。

A 1？ 1はあるよ。

B 1があつたらいいね。そうしたら、4に1を足して、5にできるからね。

D だから、あるんだよ。
B あったらしいね。
D あるんだけどなあ。
C あったかもしれないよ？ 昔はね。
A あっ昔の話なの？
D 昔の話じゃないよ。
A 昔はよかったって、言う人はいるよね。
B 思いはあふれちゃうからね。
D おっ、哲学か？
A えっ哲学クラブ？
B 哲学クラブじゃないよ。
C 哲学クラブだよ。
B 哲学クラブじゃないって。
A 哲学クラブでしょ？
D 哲学クラブじゃない。
C 哲学クラブだよ。
B 哲学クラブって何。
C 哲学クラブだよ。
D 哲学クラブか？
A 哲学クラブじゃないの？
C 哲学クラブだよ。
B 哲学クラブじゃない。
A 哲学クラブでしょ？
C 哲学クラブだよ。
D 哲学クラブ？
C 哲学クラブだよ。
D 哲学クラブねえ。
C 哲学クラブだよ。
D 哲学クラブか。
A 哲学クラブでしょ？
D 哲学クラブかもね。
B 哲学クラブじゃないよ。
D 哲学クラブだよ。
B 哲学クラブじゃないって。
C 哲学クラブだよ。
B 哲学クラブって何。
A 哲学クラブだよ。
C 哲学クラブでしょ？
D 哲学クラブだよ。
B 哲学クラブって何。
C 哲学クラブだよ。
D 哲学クラブだよ。
B 哲学クラブじゃないよ。
A 待って。……哲学クラブじゃない！
D 哲学クラブだよ！
A 哲学クラブじゃないよ。

B あれ何だっけ。ほら、あの、歌。

A え？

B 何だっけ、ほら。

A 何の話？

B ほら、あの、ろろっ

A え？

B ほら、ろろっ

A 何それ、知らないよ。

B あれだよ、ろろっ

A 知らないよ。

B 知らない？

A 知らないよ。

D 知ってるよそれ。ザ・ローリング・ストーンズだ。

B ろろっ

D ザ・ローリング・ストーンズが1978年、サマー・オブ・ラブだった。ジミヘンはモロッコに行って、ジャジュカを録音し、ニール・ヤングはビッグ・ピンクのベースメントでセッションを重ねた。カート・コバーンが死んだ年さ。まだクイーンは結成もしていなかった。脱退する前のブライアン・ジョーンズが関わった最後の曲さ。ゴダールの映画にもなってるよ。マジカル・ミステリー・ツアーっていうんだ。ソフト化はされてないよ、権利の関係でもめててね。僕は新文芸坐で観たんだけど。

A 詳しいんだね。

D 常識さ。

A これは知ってる？ あのね、ABCDっていうクスリがあって、飲むとスゴイ。世間には、赤か青かっていう話があるよね。知らない？ モーフィアスの例のあれさ。赤が真実で、青がまやかし。そういうクスリだよ。大抵の人は、赤を飲んだって思ったがるよね。誰もが、これは真実だと思っている。目の前にあるこれは真実だ。フェイクであるはずがない。だから自分は赤を飲んだんだって。自分はよくわかってるんだって。ところがここに罠があるんだな。つまり、ひとつの真実に目覚めるということは、他は全部フェイクだっていうことさ。つまり赤っていうのは、フェイクを生むクスリなんだよ。でもABCDは違うんだ。真実を拡張するのさ。人類が滅びかけてるのも、幸せな気持ちでベッドから目覚めるのも、どっちも真実なんだ。君は何をしたっていい。自由さ。戦ってもいいし、戦わなくてもいい。だってどっちも真実なんだから。気分がいいんだ。気分で真実を渡り歩くんだ。ABCDには、AからDの4つがある。ちょうど僕たちの数に合ってる。奇跡だと思わないかい？僕は奇跡だと思うね。

A、Cにクスリを渡す。C、それを噛み砕く。

C チョコミントの味がする。

A、Dにクスリを渡す。D、それを噛み砕く。

D 外国のキャンディみたいな味だ。

A、Bにクスリを渡す。B、それを噛み砕く。

B そろそろ、我々が向かっている場所について話そうか。みんな、気になってるよね。気になってるよね？ その場所は、東京湾から2時間ちょっと。天気の良い日は陸地から肉眼で見えるけど、Google Mapには載ってない。それだけの場所ってことさ。この島は、完成したのは平成2年。はるか昔さ。人類が火を発見するより古いんじゃない？（はっははは）今は人間は住んでいない。ただ残されたものがあるだけさ。僕は行ったことがないよ、初めて行くんだ。でもそこは、樂園だって聞いている。

C 樂園が存在するなんて、そんなこと本当にあり得るの？

B あり得ると思う？

C あり得るの？

B この島は、とある遺言によって作られたんだ。樂園を作れというね。そして設計は進められた。某省庁が主体となって。一応報道はされたよ、もはや知る人はほとんどいないけれども。さて、それでは、そこは一体どういう樂園なんだろう？ これは僕は噂でしか知らない。断片的な写真は見たことがあるけれども。それによると、ペパーミントの風が吹いているという。スポーツに最適な気候さ。しかも文化的にも洗練されていた。ナムジュン・パイクの映像がそこらへんにあってさ。島に流れるBGMは、ブライアン・イーノと坂本龍一によるもので、デヴィッド・ボウイも少し囃んでいたらしい。海沿いの高速道路を、カローラⅡに乗って、ショッピングモールまで買い物に出かけたら、交通安全の標識は全部、糸井重里が書いている。サントリーのペンギンだの、ソニーのロボット犬だのがあちこちにいてさ、道を歩けばハイライトの吸い殻が落ちてる。根拠はないけど、きっとそれは本当なんだろうなと思うんだ。そして僕は行くべきだって思った。それはすごく大切なことなんだ。お盆に実家に帰るようなものさ。

C とある遺言？

B とても大事な遺言だったんだよ、この国にとって。

C 遺言っていうことは、その人は死んだの。

B 死んだんだろうね。でも、やっぱり死んでなお、すごいんだろうね。それだけの人だったんだろうね。僕はまったく想像がつかないけれども。なにしろまさに当時、僕は赤子だったし。でも赤子であっても、無関係ではないという、そういう何か、ほら僕は生まれたときからこの湿度の中にいてさ、呼吸しているんだよ。呼吸っていうのは、やめられないし、やめちゃいけないし、生きている、義務だね。

D、そばを食べ始める。

B それは？

D そばさ！

D、そばを食べているが、ふいに

D 思い出した！ 聞いたことがある。そう、聞いたことがある。今思い出したよ。思い出してしまったというべきかな。これは幸いなことなのか、不幸なことなのか、わからないけれども。でもそういう判断はいけないね。思い出してしまったんだから。

C 話さなくたっていいんじゃないの。

D 何年か前に、それはまとめられて拡散されてた。よく燃えていた。そして一瞬で忘れられていたのを、今思い出した。とある芸術家だ。芸術家っていうのも、なんかうまく言えないんだけど、とにかくそんな感じの誰かだった。名前くらいは聞いたことがあったよ。島に招かれたんだ。そして作品を作った。その作品じたいは、別に問題じゃなかった。なんか、どこか変な場所で、変な踊りをやって、それを映像に撮ったっていう、それだけだった。問題は過去の作品だった。それは架空の設定を使った、これも映像作品で、しかもだいぶ荒唐無稽な設定だった。昔ながらの、SFぽい感じって言えばいいのかな。大きな地震だか、それか地殻変動だったか、詳しいことは覚えていないんだけど、とにかくまあそんな感じのやつで、日本がすっかり沈んでしまうっていうね。それだけさ。希望のない話だよ。その作品が、海外のウェブサイトに乗っていてね。とあるネットユーザーが発信し、さらに有名なノンフィクション作家と、ぼちぼち大物の政治家によって拡散した。そしてたくさんの、悪い言葉が言われた。国に対するナントかって、汚い言葉さ。僕はそのまとめを読んだんだ。そしてうんざりしたね。僕はとっとと忘れることにしたよ。プルーストを全部買ってね。ネットを見る代わりに読んだ。毎日毎日、家でも電車でもね。最後まで読み終わる頃には、僕は事件のことはすっかり忘れていたんだよ。そして今この島の風景を見てはつきり思い出した。あの映像の背景に写っていた、たしかにこんな感じの風景だった。

4人、島にいる。

（ペパーミントの風。スポーツに最適な気候。）

4人は島で遊ぶ。

※ところで遊ぶというとき、一体何を指すだろうか。まずは子供の遊びのようなものが想像されるが、例えば海で遊ぶというとき、それはいわゆる鬼ごっことか、ままごととかと、似ているだろうか。それは時には風景を眺めることだったり、ただ海に浸かっていることだったりする。何かの遊びらしいことすらなくてもいいという、それですら遊びの範疇になってしまうという、あらゆるものを「遊び」の中にくるんでしまう何か曖昧で大きなものが海にはある。海に行ったことのない者は、海で遊ぶということがよくわからないだろう。正直に言うと、私もよくわかっていない。わかっていないが、それは楽しいものであると思う。友達と行っても良いし、一人でも楽しめるだろう。いつまでも。長いあいだ。

A、遊ぶのをやめる。全員、Aを見る。

A そうみんな気づいているよね。僕がそのメディアアーティストさ。とても懐かしいね。まさかまた来れるとは思っていなかった。人生には時々不思議なことが起こる。不思議なことがいっぱいさ。昨日ね、お茶を淹れたら、茶柱が立ったんだ。不思議なことも起こるもんだ。僕はあの日以来、いまいち張りのない、はんぺんみてえな生活をしてた。おいしくもねえはんぺんみてえな。思い切って、文句でも言いに行つてやろうかとも思ったけど、どこに？ やめたね。あの作家とべつたりの出版社か、あの政治家の後援会の事務所か、でもそんなことじゃない。僕はいつそぜんぶ諦めちゃうべきだったか、とか、思いつつ、ソファに沈む毎日だった。早朝の労働を始めた。それは自分

にとってよいことだと思ったんだ。屋前に切り上げて、午後から制作をし、日が沈んだらぼちぼち眠くなる。そうやって何とかかんとか正気を保つような日々だった。ディスクユニオンでエンヤを買ってね。こんなにはんぺんな僕だけど、エンヤの声がきれいだってことはわかるしね。僕はすべて努力していたんだよ。これまでが全部努力だった。でも同時に不安でもあるよね。努力はいつまで続けられる？僕はいつから努力をしていたのかもよくわからなくなってしまいかけている。変化が必要だった。でも変化のタイミングなんてわからない。パンツをいつ買い換えるべきか、よくわからないみたいに。僕はきっとここに魂を置いてきてしまったんだ。魂の存在は信じてるよ。あの日以来僕はここに縛られた幽霊でしかないんだ。時々夢を見る、すぐ忘れちゃうけど。ロボットの犬たち、このペパーミントな風。いつか消えてしまっても、いいんだよ、ここは今だけはずっと永遠なんですアイランド、というのが、この島の正式名称。知らなかった？僕は取り戻したかったんだ、魂というものを、僕は知っているから。取り戻したら、はんぺんは、変身できる。何に？知らないけど、蟬とか？ケツサクだ！はんぺんが、割れると、蟬が羽化するなんてね！

ちょっとみんな、音楽をかけようか（音楽、Wilco “I Am Trying To Break Your Heart”。3人踊る。AはiPhoneのカメラを構え、動画の撮影をする）。いつか消えてしまっても！いいんだよ！ここは！今だけは！ずっと永遠なんです！（撮影をやめ、iPhoneを操作する。裏声で）ツウィーヨ！

Aもダンスに加わる。

舞台、徐々に暗くなる。

C（薄暗がりの中で）血ではなくて何か、もやみみたいな空気が体を流れているような気分で目が覚める朝に、まず最初に昨日のことを思い出さなきゃいけないのはしんどくて、私はカーテンを替えるタイミングを逃したまま、3回目のスヌーズを無視してしまった。ここではないだろう、私の人生は、という思いがよぎる。果たして？旅をしていた、あのとき、魚ばかり食べて、何者だかわからない魚を。私は生涯に一本だけ、タバコを吸ったことがあり、その土っぽい質感を、喉の奥で思い出して、今日は仕事がある日だっけ、ない日だっけ。私は今日という一日に、意味を見いださなことを決めました。枕の横に薬が1錠。もったいないから飲み込み、今日のローテーションの服は、誰かからもらったやつで、正直私には似合わない。私が誰とか、かつて何者であったとか、私にとっては関係がなく、あ、これまでになく頭がクリエイティブな状態になっていることに気づいた、たった今。仕事に行ってきます。愛車のプリウスで。

舞台暗くなる。